

パラリンピックを前に

五輪の熱気がさめやらないブラジル・リオデジャネイロで七日から、パラリンピックが始まる。開幕を前に、障害者スポーツの抱える課題と、大会のみどころを三人に語ってもらった。

◆同じ出発点、用意して アテネ大会出場のパラアスリート・鈴木ひとみさん

鈴木ひとみさん

写真

今、取り組んでいるのは射撃とカーリングです。モデルの仕事をしていた三十二年前、事故で車いす生活になりました。当時はバリアフリーという言葉も存在せず、障害者スポーツは、車いすのバスケか陸上しかないというような時代でした。

一年七カ月間の入院中、自分の将来が不安になって、誰も来ない病院のスロープを車いすでひたすら走りました。それで陸上競技をやって、国内大会で優勝し、英国で国際大会に出て、スラロームが「金」など四個のメダルをとりました。二〇〇四年のアテネ・パラリンピックには、射撃で出場しました。

障害者スポーツの裾野は広がってきましたが、まだハードルがあります。車を運転できるか、公共交通機関でも良いのですが、会場へ一人で行って一人で帰らなければならない。インフラも違います。大都市と地方で。欧州と比べて、北欧の方が進んでいると言う人がいますが、東京の方が上。移動のしやすさが、大いに関係します。

家族の理解も必要。反対されてまでやりたいのかとなると、ちょっと。私は「もうモデルには戻れない。私の目標は専業主婦になることかなあ」と考えていました。でも、夫は「仕事を持つことがひとみの喜びだ」と私に大きな期待をしてくれた。

障害者だから保護してあげなければ、という時代ではないと思います。夢を実現させるかドロップアウトするかは、本人次第。そこで一番大事なことは、一般の人と同じスタートラインに立てることです。今は、残念ながらそうではない。インフラや社会の理解…。だから、教育が大事です。例えば、普通学級と特別支援学級の交流。教科書よりむしろ、まず一緒に過ごすことが教育だと思います。

リオで最も注目しているのは、車いすマラソンです。障害者スポーツをリハビリととらえている向きがありますが、この競技はすごい。人間業じゃない。下りなんか時速五十キロを超えます。健常者がやって、かなうかどうか。

座右の銘は「百年たったらみんな骨」。スポーツをやめようと思った時にこれを聞き「骨でない今、私には何ができるだろうか」と考える余裕ができました。カーリングは一八年の平昌大会を目指して頑張っています。射撃は、東京を視野に入れて練習しています。

(聞き手・小野木昌弘)